―道徳科の研究―

名前　細野　貴寛

１　研究主題

自己の生き方についての考えを深める学びの創造

２　研究主題について

（１） 研究総論との関連

本校研究主題は「ともに学び，学び抜く子供−非認知能力に注目した授業を通して−」である。「ともに学び」とは，人と関わり合いながら，主体的に学ぶ子供である。自分の考えを友達に伝えること，友達の考えを聞くこと，友達の考えと比べること，友達と協力することなどを学習活動に取り入れることで，教科の学びを深められると考えている。「学び抜く」とは，困難な課題に対してもあきらめずに向かい合い，試行錯誤しながら取り組んだり，解決策を考えたりしてやりとげようとする子供である。粘り強い取組を行おうとする子供，自らの学習を調整しようとする子供，学習指導要領に示された「学びに向かう力」と大きく関連しているものであると考えている。以上の研究総論を受けて本校道徳科では，研究主題のもと以下の目的，内容で研究を進めていく。

目的	道徳科の授業実践を通し，「ともに学び，学び抜く子供」の具体的な姿を明らかにすること
内容	「意欲」「粘り強さ」「自己理解」に働きかける手立てを明らかにする

道徳科の目標である「よりよく生きるための基盤となる道徳性」を養うためには，道徳的価値の理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てることが学習指導要領に示されている。そこで道徳科の授業では，「自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考える」という「道徳的価値の自覚」を通して，子供がこれからの生き方の課題を考え，それを自己の生き方として実現していこうとする願いや思いを深めていく学びの実現を目指す。このような学びの積み重ねが子供の道徳性を養っていくと考えている。

（２） 道徳科における「意欲」「粘り強さ」について

自己の生き方についての考えを深める学びの過程には，子供が以下のような「意欲」「粘り強さ」を発揮している姿が現れると考えている。

「意欲」	道徳的価値について自分との関わりで考えている姿
「粘り強さ」	これからの生き方について願いや思いを深めている姿

「自分との関わり」については以下のように考えている。

人間としてよりよく生きる上で大切な道徳的価値を，自分の事として感じたり，考えたりすること。これまでの経験やそのときの感じ方，考え方と照らし合わせながら考えること。

子供が道徳的価値について自分との関わりで考えることで，自分自身を道徳的価値に照らし合わせ，現在の自分がどのような状況にあるのか把握することができると考えている。つまり，子供が「道徳的価値の自覚」を深めることができると考えている。

「願いや思いを深めること」については以下のように考えている。

道徳的価値は自分にとってどのような意味があるものなのか，また，どのようにいかしていけるものなのか，これからの自己の生き方について考えること。

「道徳的価値の自覚」を通して，自身の状況を把握する，そしてこれまで生活及びこれからの

自分の生き方の課題を考え，それを自己の生き方として実現していこうとする願いや思いを深めることが「よりよく生きるための基盤となる道徳性」を養うことにつながると考えている。

（３）道徳科で考える「ともに学び，学び抜く子供」の姿について

道徳的価値について自分との関わりとして考え，様々な考え方や感じ方に触れることを通して，自己の生き方への願いや思いを深める姿

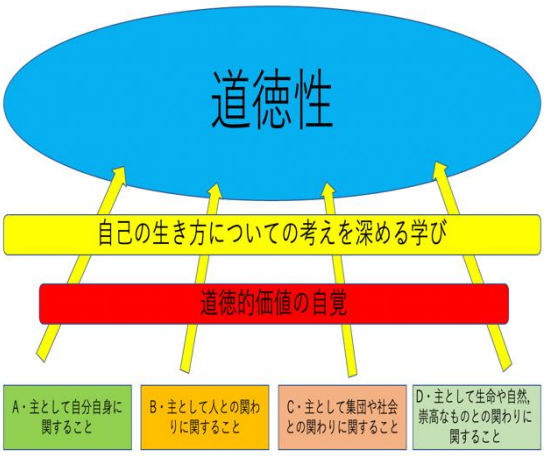

図1 「よりよく生きるための基盤となる道徳性」について

道徳科では，以上の（１）（２）から「ともに学び，学び抜く姿」「道徳科の本質に迫る姿」を自分との関わりで考える姿，様々な考え方や感じ方に触れることを通して，自己の生き方への願いや思いを深める姿と考えている。図１で示したように道徳的価値の自覚，そして自己の生き方への願いや思いを深める学びを通して，「よりよく生きるための基盤となる道徳性」を養うことができると考えている。子供が今後，様々な場面，状況において，よりよく生きるための適切な行為を考え，選択し，実践する子供の育成を目指し，上記の「ともに学び，学び抜く子供」の姿を設定した。この姿の実現に向けて，道徳科授業を実践していく。

３　研究内容「ともに学び、学び抜く子供」を育成するための授業について

（１）　２年次の研究について

１年次では，A−２正直，誠実の内容項目で授業実践を行った。成果としては，生活場面を活用した導入により子供が自分との関わりで人間理解について深めている姿が見られたこと，問い返しで子供の生活経験を問うことで，子供がこれまでの経験を想起し，道徳的価値について自分との関わりで考える姿が見られたこと，交流する場を設定したことで，子供が様々な考え方を自分の中に取り入れ視野を広げる姿が見られたことである。

一方，これからの生活への願いや思いを深める姿，つまり自己の生き方についての考えを深める姿は一部の子供に限られ，１年次の研究の課題となった。これからの生活への願いや思いを深めるためには，道徳的価値に照らし合わせた際に自身がどのような状況にあるのか，子供が自己理解を深めることが必要であると考えている。そのためには，子供の道徳的価値の自覚が深まることにより，これからの自分の生き方について願いや思いをもつことができると考えている。この姿が，道徳科における「粘り強さ」であると捉え直すことにした。

以上の成果と課題から，２年次では，「ともに学び，学び抜く子供」「道徳科の本質に迫る子供」を育成するために，授業実践を行っていく。

（２）道徳科における非認知能力について

研究総論で述べられている通り，非認知能力は学習指導要領に示されている「学びに向かう力」と大きく関連している。中央教育審議会教育課程部会「考える道徳への転換に向けたWG資料２」では，資質・能力の三つの柱と道徳科との関係について整理している。「学びに向かう力」については，道徳科の学習活動に注目した捉えとして，以下のように示している。下線部分を重視するといった整理が考えられるとの議論がなされている。

<u>よりよく生きるための基盤</u>となる道徳性を養うために，道徳的諸価値についての理解を基に，<u>自己を見つめ，</u>物事を（広い視野から）多面的・多角的に捉え，<u>自己（人間として）の生き方についての考えを深める。</u>

自己を見つめる学習活動とは，自分との関わりで考えること，自己の生き方についての

考えを深める学習活動とは，これからの生活への願いや思いを深めることだと捉えている。つまり，これらの学びの過程には本校道徳科が想定している「意欲」「粘り強さ」を子供が発揮していると考えている。

以上の学びの過程をスパイラルで繰り返していくことが，道徳科の目標である「道徳性」を養うことになる。

（３） 道徳科における「意欲」「粘り強さ」に働きかける授業について

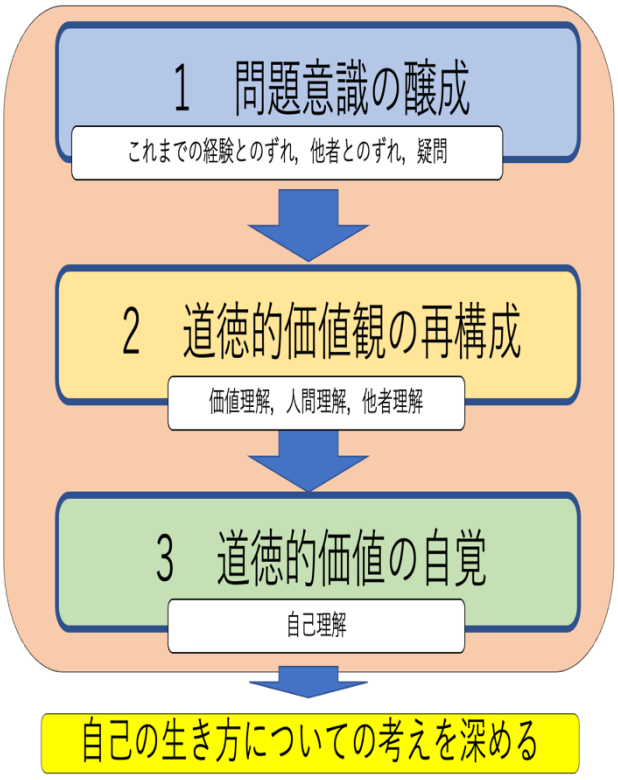

図２　道徳科授業構想

図４の構想の流れで授業実践を行う。

１は，これまでの経験とのずれ，他者とのずれ，疑問をうむことで，子供が自分との関わりで道徳的価値について考える姿を期待したい。

２は，自己，他者との対話を通して，価値理解，人間理解，他者理解を深めることで子供が道徳的価値観を再構成する姿を期待したい。

３は，道徳的価値に照らし合わせて自分がどのような現状にあるのか自己理解することで子供が道徳的価値の自覚を深める姿を期待したい。また、１・２の過程においても子供は自己内対話、他者との対話と通して、自己理解を深めている。

道徳的価値の自覚を通して，授業の終末には子供が今後の生活への願いや思いを深めている姿を目指したい。

図２の授業構想で実践を行うことを通して子供が自己の生き方についての考えを深められることをめざす。

（４） ２年次の具体的な指導方法の工夫，手立てについて

①ユニット学習の活用

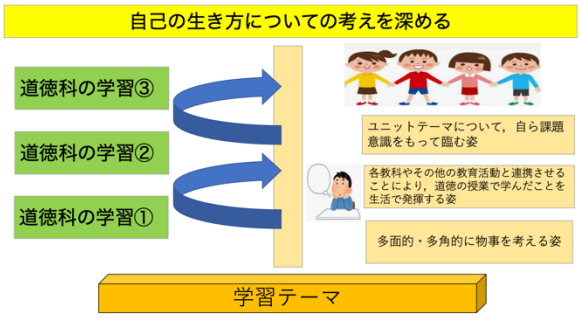

図３　道徳科ユニット学習

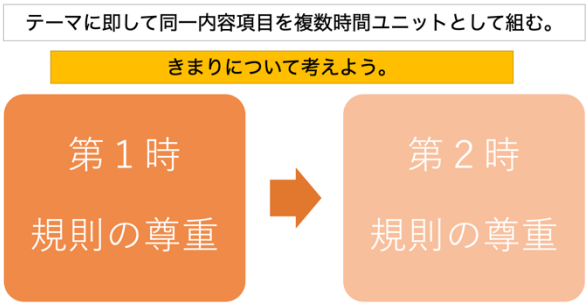

図４　道徳科ユニットの組み方

複数の教材を複数時間取り扱い，１つのユニットとしてねらいにせまっていきたい。図３で示すように複数の教材を複数時間扱うことで道徳的価値について子供がより多面的・多角的に物事を考えることができ，道徳的価値の自覚を深めることができると考えている。また，図４はユニットの組み方案である。テーマに対して同一内容項目で複数時間授業を行っていく。ユニットを組むことにより，ユニットテーマについて子供が自ら問題意識をもって臨むことができ，自己理解を深めながら願いや思いをもつ姿を期待したい。また，子供の自己の

生き方についての考えの変容をユニットという大括りなまとまりを踏まえた評価も可能になると考えている。

②発問の検討

〇道徳的判断力，実践意欲と態度をねらいとした中心発問

「道徳教育の在り方に関する懇談会」報告書(H25.12.26)では，授業方法が読み物の登場人物の心情を理解させるだけなどの型にはまったものになりがちであることが課題として指摘されている。

授業の核となる中心発問は，教材を分析した上で，問題の起点の場面，助言者の出現場面等，道徳的問題が生じて，主人公（登場人物）が考えたり悩んだりするような場面に設定する。子供の生き方についての考えが多面的・多角的に表出するのか，ねらいと深く結び付くのか，教材文の特性など踏まえ，指導意図を明確にした上で設定する。

〇問い返し

ねらいに迫る子供の考えや子供の経験，その時の感じ方や考え方を問い返すことで子供が多様な道徳的価値観に触れ，再構成した価値観で自分の在り方や生き方と関連させて見つめられるようにしたい。自己理解を深めることで，一層自己の生き方についての考えを深めることができると考えている。

③ICT の活用

道徳科における ICT 活用のメリットとして，子供が即時的に多様な考え方，感じ方に触れることができ，価値理解や他者理解，人間理解を通して道徳的価値の自覚を深められること，また学習履歴を容易に蓄積，必要に応じて閲覧することが可能であることだと考えている。

そこで，導入，展開，終末，授業後で以下のように活用していきたい。

〇導入

アンケート機能等を活用し，子供のこれまでの道徳的価値への捉えが表出できるようにする。これまでの経験とのずれ，他者との捉え方のずれをうみ出すことで，子供の問題意識を醸成できるようにしたい。

〇展開

中心発問について，子供の考えを出力できるようにしたい。また，多面的・多角的な考えを子供が即時共有でき，様々な考え方や感じ方に触れることを通して子供が道徳的価値観を再構成できるようにしたい。

〇終末

スプレッドシート等を活用し，学びを蓄積できるようにしたい。学びの変容を認知するだけではなく，子供同士で共有できるようにすることで，記述からも他者理解を深められるようにしたい。

〇授業後

Google サイトを活用し，学習した内容項目に関わる子供の日常生活の写真等を蓄積，閲覧できようにする。学習と日常生活をつなげることで，実践への意欲を高められるようにしたい。

〈引用文献・参考文献〉

・文部科学省(2018)「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」

・中央教育審議会『道徳に係る教育課程の改善等について(答申)』平成 26 年 10 月

・浅見哲也(2020)『こだわりの道徳授業レシピ』東洋館出版社

・赤堀博行(2013)『道徳授業で大切なこと』東洋館出版社

・坂本哲彦(2014)『道徳授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社

・坂本哲彦(2018)『「分けて比べる」道徳科授業』東洋館出版社

・永田繁雄(2019)『小学校道徳指導スキル大全』明治図書